

日本赤十字看護学会10周年記念

日本赤十字看護学会のこれから

The Future of The Japanese Red Cross Society of Nursing Science

新道 幸恵 Sachie Shindo

(日本赤十字広島看護大学)

キーワード：日本赤十字看護学会の発展、赤十字の理念、国際赤十字・赤新月運動の基本理念、
日本学術会議、日本看護系学会協議会

key words：The Development of The Japanese Red Cross Society of Nursing Science, The philosophy of Red Cross,
The Fundamental Principles of the International Red Cross and Crescent Movement,
Science Council of Japan, Japan Association of Nursing Academies

I. はじめに

日本赤十字看護学会（以下本学会と記述）は平成12年に当時日本赤十字（以下日赤と記述）看護大学の学長であった樋口先生を理事長として発足したことは本学会員には周知のことである。今年は発足後10年目に当たり、その記念すべき学会長を日赤看護大学の守田美奈子教授が務められるという機会を得て、10周年記念式典および記念事業としてシンポジウムを開催することができた。

10年を節目として記念式典および記念事業を行うことは温故知新の精神で、学会のさらなる発展を探る最良の機会であると思われる。この記念のシンポジウムにおいて、わずか3年間ではあったが理事長を務めた者の責務として、本学会のこれからの期待や課題について、本学会の発足の趣旨や課題、学会発足時の看護系学会を取り巻く状況などを振り返りながら、述べることにする。

II. 学会発足時の課題

本学会は発足の趣旨を「赤十字の理念に基づいた赤十字の看護の発展を目標にし、英知を集め、それを共有し、真摯に批判しあう学会組織を設立すること」としている。この趣旨は、本学会の特性および目標が明記されている。この背景には、我が国の赤十字教育における長年の専門学校の歴史に、大学教育としての歴史を重ね、拡大して、学術活動を支え発展させる人材

の存在がある。

本学会は発足時の課題として、1. 人間の生命と健康にアプローチする看護学の学術水準の向上、2. 実践、教育、研究に携わる人々が互いに知識を交換、共有し、相互に研鑽しあえる場作り、3. 赤十字活動をはじめ、国際的に活躍する看護専門職を育成する中心的教育機関の役割を担い、研究ネットワークの拡充の3つをあげている。これらの課題は発足の趣旨にある看護学の発展をもたらす具体的な活動の方向性を示したものと見えよう。

III. 看護系学会を取り巻く状況

本学会発足の平成12年には、看護系の学会は20を超え、看護学の発展を目指した学術活動が活発化していた。このような看護系の学会の増加をもたらした発展には、日本看護系学会協議会によって発足がもたらされた日本看護科学学会の活動によるところが大きい。この学会は、発足当初から看護学の発展を目標に学術会議への登録学会になることを目指した活動を行っていた。日本学術会議への登録学会になるためには、平成17年に日本学術会議の組織や機能が大改革されるまでは、会員数、学会活動としての学術会議の開催、学術雑誌の発行などの要件があった。日本看護科学学会が日本学術会議の登録学会になってからは活動の目標を日本学術会議に看護の会員を送り込むことへと推移していった。その活動の一つとして、看護系学会の発足支援とそれらの学会が日本学術会議の登録学会へと

発展することへの支援を行っていった。一方、看護系大学及び大学院は著しく増加し、平成13年には看護系大学が100校、大学院が53校になっていた。それらを背景として看護系の学会が増加していった。

本学会設立の翌年の平成13年には「看護の学術発展を促進する強固な組織を作る」ことを設立趣旨として看護系学会協議会が本学会の初代理事長であった樋口康子氏を会長として設立された。その学会は看護系の学会を会員とし、発足時には23、翌年には26の学会が会員となっていた（日本看護系学会協議会、2002～2005）。

日本看護科学学会を中心とした看護系学会協議会の連動した活動によって、平成17年には、日本学術会議の会員に南裕子氏が就任され、看護学からの会員が初めて誕生した。その同じ年の平成17年には看護系学会等社会保険連合が看護系39学会等によって「診療報酬における学術的エビデンスに基づいた適切な看護評価の構築を提言する」ことを目的に発足した。

本学会は、上記の日本看護系学会協議会及び看護系学会等社会保険連合に発足当初から会員として活動に参加していた。

IV. 本学会の特性

平成21年には看護系学会協議会に加入している看護系学会は36に達している。本学会は28番目の看護系学会として発足した。看護系学会の設立趣旨や目的、会員資格から分類すると、看護学の発展を目指している学会、看護学の特定の専門領域の発展を目指している学会、大学院の開設に伴って大学関係者や卒業生・修了生を主な会員としている学会の3つに分類できる。本学会は日本赤十字学園に、東京、北海道、広島に看護大学が設立され、東京の日本赤十字看護大学に大学院博士課程が発足したのを機会に、赤十字の大学の教員や卒業生の有志によって「赤十字の理念に基づき会員相互の研鑽と交流を図り、看護学の発展を目指す」ことを目的に設立された。

表1. 赤十字の原則～赤十字の理念に基づく看護～

国際赤十字・赤新月運動の基本原則	
人道	人間の命と尊厳を守る 相互理解、友情、協力、堅固な平和を助長
公平	国籍、人種、宗教、社会的地位で差別をしない
中立	全ての人々からの信頼を得るために、政治的、人種的、宗教的、思想的性格の紛争には参加しない
独立	行動の自主性
奉仕	利益を求めない奉仕的救護組織
単一	全ての人に門戸を開き、その国の全領土にわたって人道的事業を行う
世界性	世界的機構、同等の権利、相互援助の義務

設立趣旨や目的は本学会の特性にみいだされ、今後の発展の方向性を示している。本学会の基本は、赤十字の理念に基づくという点にある。赤十字の理念は表1に示した赤十字の7つの原則（日本赤十字社、2007）に内在されていると考えられる。赤十字の理念に基づいて看護学の発展を目指すという本学会の特性は、人間の命と尊厳の尊重を基本として国籍や民族等、あらゆる差別も偏見もなく、平和な時も戦争の時でも公平、中立に、自主性を維持し、特別な利益を求めない奉仕精神に基づいた看護学の発展を目指すことであるといえよう。

V. 本学会のこれから

本学会は、今年度設立10周年を迎え、第4期目の理事会が発足した。本学会の歴史を振り返ると第1, 2期は、学会としての体制を整える時期であったと思われる。即ち、学術集会の開催、学会誌の創刊とその継続的な発行、研究助成制度の発足と継続、等の活動を通して、看護学の発展に寄与し、赤十字の看護学の特性の追求がされてきた時期と言えよう。第3期目は第1, 2期における活動の蓄積の上に、赤十字看護の独自性を追求することに重きを置くことへと拡大し、新たに臨床看護実践開発事業委員会、国際活動委員会、災害看護活動委員会を発足させた。第4期以降の学会活動の方向性は、それまでの学会活動の歴史の上に、新たな方向性が新理事会によって打ち出されるものである。それだけに、第4期の理事ではない筆者が「学会のこれから」を論じるのは僭越な感を否めない。しかし、この原稿は、10周年記念事業のシンポジウムに於いて、当時の理事長として発言した原稿を基にしていることを斟酌頂きたい。また、一会員の期待であると読み取って頂ければ幸いである。

本学会のこれからの活動としては、当然であるが、21世紀における看護学の発展を目標にした活動を行うことであり、次に、赤十字の看護学の構築を目指すことであろう。これらの目標の実践に当たっては、他の学会との連携・協働も有意義であろう。看護系学会の連携・協働の仕組み作りは本学会発足以降進んでおり、看護系学会協議会、看護系学会等社会保険連合が発足した。これらの組織が発足と同時に、本学会も会員として加入している。これらの組織に積極的に関わることで他の学会から学ぶ機会も多いと思われる。これらの組織には、地域貢献事業に積極的である学会、或いは専門的な資格付与やそのための研修プログラムを設けている学会がある。

学会における看護学の発展は学術集会の場での活発な討議、学会誌の充実、学会員の学会への積極的なコミットメントによってもたらされる。学術集会は主催者である大会長を中心とした企画委員会によってプロ

グラムが企画され運営されるが、その集いに理事会主催の企画として、会員の研究能力の育成、赤十字の看護学の発展、赤十字の国際活動の継承、等を目標にしたプログラムが組み込まれるようになった。今後とも、学術主催側のプログラムに、理事会主催のプログラムも含めた企画が看護学の発展に大いに寄与することになろう。学会誌は、良質な投稿論文が増加したことから平成21年度から年2回発行されることになった。学会誌の編集及び査読を担当する委員の方々は、査読を通して論文指導を行うという役割も兼ねながら学会誌の質を維持されてきたと伺う。学会の特性は学術集会の企画の内容及び学会誌の内容に最も端的に表れるし、積極的に主張できる場でもある。今後とも、看護学の発展及び赤十字の看護学の発展をリードする企画を期待したい。

看護系の学会が多数設立され、それぞれの独自性のもとに活発に活動されている近年、本学会の独自性のもとに赤十字の看護学の発展を目指すことが一層求められていると思われる。本学会の独自性は、本学会の設立の趣旨に述べられているように赤十字の理念に基づいていることは前述した。赤十字の理念には、看護学に共通する理念が含まれている。赤十字の理念が看護学共通の理念と異なるのは「人道」という赤十字の原則のもとに赤十字の機関や施設で活動する者の支えとなり、規範となっていることである。赤十字の理念に基づいた看護は赤十字の活動と共にあり、100年以上の歴史を持つ看護教育によって発展、継承されてきた。今後も本学会は看護の実践及び看護教育によって継承されてきた「赤十字の理念に基づいた看護」を発掘し、紡ぎ、看護学として発展させることであると思われる。それには、近年急速に発展した看護学を活用しながら新たな「赤十字の看護学」を構築することが今後の課題でもあろう。

本学会は、看護の実践の場で活躍する会員が教育、研究を主な業務とする会員よりも多いという特性がある。このことを利点として、実践、教育、研究の統合によって、本学会の独自性が発揮されることを期待したい。

VI. おわりに

21世紀が始まる直前に21世紀の看護学の発展を目指して発足した本学会は21世紀と共に歩むことになる。このことは今後、約90年間をリードする看護学を目標にする一方で幾度かの変革と多様化が予想される時代に於いて持続し得る学会になることが課題であろう。

身近な課題としては会員の流動性に対する課題がある。会員の流動性はどの学会に於いても見られる現象であるが、本学会の会員の流動性の高さは他の学会に比べて顕著である。それには、看護の実践の場で働いている会員が多いこともあって、赤十字の病院を退職すると同時に学会を退会するという会員が少なくないという事情がある。学会の発展は会員の積極的な関与によってもたらされることを考えると、この現象への対策は疎かには出来ない。

本項を書くに当たって、看護系の学会や看護系学会協議会、看護系学会社会保険連合等のホームページに掲載されている会則などを参考にさせて頂いた。

文献

- 日本看護系学会協議会（2002～2005）. 日本看護系学会協議会ニュースレター，創刊号，2号，3号，4号，5号.
- 日本赤十字社（2007）. 日本赤十字社の国際活動2007，2.